

雲浜公民館歴史講座

小浜のお茶あれこれ

平成 16 年 8 月 1 日（日）

小浜市教育委員会 下仲隆浩

1. そもそもお茶って何？

2. 日本人とお茶

上流階級のお茶・茶道の成立

庶民への茶のひろまり

3. 小浜のお茶あれこれ

お茶・・・カメリア属 ツバキ・サザンカなどと同種（日本原産）
お茶（中国山岳地帯？雲南省からアッサム）不明
雲南だけで野生の大茶樹が19本
日本・・・ヤマチャ（九州・四国山岳地）

お茶は植物として1種類

その土地の風土などに合わせ品種改良。（EX 犬など）

【 緑茶・中国茶・紅茶 】 製法の違い。

中国茶（ウーロン茶の発展形態）

「チャ、チャイ系列」中国に近い国、陸続き（広東語）

「テ、テー系列」ヨーロッパ諸国（福建語）、オランダ船

人類と茶の遭遇・・・記録上では約2,000年前。神話では約5,000年前。

唐の時代『茶経』760「茶は南方の嘉木・・・」

唐の都、長安では喫茶店が大流行。

平安時代『日本後紀』792-833の歴史。「嵯峨天皇が近江国梵釈寺で僧永忠から茶を献上」815?が文献上初見。遣唐使（空海・最澄）などにより入ったか？

（当時：団茶・・・蒸してつき固めた茶を乾燥・固形化し、削って釜で煮出した液を飲む。）天皇・貴族などの上流階級のみ。

宮中行事「季御読経（きのみどきょう）」とお茶。

奈良時代からの行事。「くず、こうぼく、しょうがなどの薬味を入れて飲む」

稲作や仏教などの大陸文化と複合的に日本に入る？

栄西とお茶・・・鎌倉時代初頭、臨済宗の開祖である栄西が、中国（宋）でお茶を医薬として学び、広く知らしめました（抹茶）。『喫茶養生記』に「お茶は養生の仙薬なり、延命の妙術なり」、源実朝に献上（二日酔い）、茶樹の栽培から蒸し製法まで細かく記述。栄西帰国後、肥前と筑前の国境、背振山に植える。その後梅尾（とがのお）明恵上人のもとへ。これより梅尾の茶を「本茶」、それ以外のものを「非茶」。律宗系（西大寺大茶盛）慈善救済の方便として民衆へ

その後の喫茶・・・茶寄合、闘茶、茶歌舞伎などが飲茶の形式化。中国の「茶礼」と結びつき茶道が成立。宇治茶も成立

南北朝時代・・・佐々木道誉

室町時代・・・東山文化（書院茶礼）立花・聞香

能阿弥開祖の東山流茶道

村田珠光（1423-1502）→武野紹鷗（1502-1555）→千利休（1522-1591）

侘び茶・・・奈良流の村田珠光。侘びと禅道。珠光好みの茶杓。

一休禅師から禅を学ぶ。「わび」という新しい境地。

招いたものと招かれたものとの間のみ（「上下関係なし」）

今までの書院広間から草庵の四畳半へ。
堺流の武野紹鷗。連歌との関連。三条西実隆に師事。
大徳寺系の禅を学ぶ。「さび」という境地。
唐物好みから国産陶器、道具の活用。竹製の茶道具。
千利休。侘び茶の完成。これまでの名器中心から楽茶碗、高麗、瀬戸、墨蹟掛け軸などで、禅の「枯淡閑寂」の精神。
現在の茶道の基礎を作りあげる。

茶のこころ

利休の七則

- 一． 茶は服のよきように点て
 - 一． 炭は湯の沸くように置き
 - 一． 冬は暖かに夏は涼しく
 - 一． 花は野にあるように生け
 - 一． 刻限は早めに
 - 一． 降らずとも傘の用意
 - 一． 相客に心せよ
- もてなしの心

「もてなし」と「しつらい」の美学、庭園・掛け軸、茶道具など様々な演出。

中世庶民への広まり・・・一服一銭、茶屋（神社や寺の門前）

江戸時代・・・・・・・・茶は庶民の文化に組み込まれる

「宇治茶」・・・徳川家光の茶壺

「ずいずいずっころばし」

「日常茶飯事」、「お茶の子さいさい」「茶々をいれる」無茶苦茶
煎茶の広まり・・・江戸中期に宇治田原の永谷宗七郎が考案。

蒸し茶葉を焙炉で乾燥させ手で揉む

（青製煎茶製法）

小浜とお茶（権力者の茶）

古代・・・・・・・・古代の物資流通、根来の茶原木の話し。

中世・・・・・・・・闘茶、三条西実隆と武田氏、武野紹鷗

室町期の一服一銭、茶屋（にない）、立売茶 門前など

江戸・・・・・・・・木下ちょうしょうし

酒井忠勝（酒井家文庫『口切帳』『茶会留』1536-1650）

小浜の商家から見つかった珍器を遠州に鑑定依頼（拾椎）

江戸牛込下屋敷の庭園・数寄屋→遠州の指揮により公儀御庭師
酒井邸を訪れた伊達政宗→利休の茶杓を折り紹鷗の茶杓を弁済
一年に50回前後の茶会。小浜での茶会は??

質素な数寄屋道具を好んだが、家光より名物茶器多く拝領。

酒井忠進

5代目古河屋嘉太夫 文化12年(1815)護松園と三畳の茶室
ここで茶道を嗜む

酒井忠義(12代)

「数寄屋をして若州候に物を見せるな」「若狭の大鱧」
幕末動乱のなか茶道具を集める
蒐集品 秀次→西本願寺→三井家 国宝油滴天目
夕陽天目、畠山茶入、国司茄子、生駒、長谷川肩衝

組屋六郎左衛門

ルソン壺と若狭盆・天目台(若狭台)
豊臣5奉行にルソン壺売却・組屋の若狭盆有名。
若狭盆をまねて若狭台(若狭塗が作られ始める)
大阪東洋陶磁美術館に油滴天目付随の若狭台
若狭盆・・・茶入を乗せる盆、方形(低い方形の脚)、内が朱漆、外青漆

小浜城の茶園場・西の丸の数寄屋

小浜城の東から北東側
西の丸に数寄屋

小浜とお茶(庶民の茶)

慶安の御触書「酒茶会のみ申まじく候」
どんな美人でも夫をおろそかにし、茶を大飲みし、物見遊山は離別
寛永の頃(1624-1644)小浜へ初て丹波より茶を売に來り、二つ鳥居
町丹波屋惣兵衛にて売候。
延宝年間(1673-1681)には丹波、美濃、近江より輸入。

稚狭考

茶は小浜家々にて製造して家用とす。他国に出て職業とするものあり。
昔はむしあぶり、享保の中頃より蒸してのち日乾かす。
京へ送ると上京では賞す、三条は南で水にあわないと賞さず。
初夏新葉の出るとき享保～元文の始め(18世紀前半)までは、鶺羽小路・質屋町に市が立つ。村々からは夜中道を急いで明け方に着く。
北丹波よりは茶に仕立てて來る(西津・名田庄・小浜で模して作るものあり)。
丹波・丹後の茶は丹後田辺より北国へ。
美濃・北伊勢・近江の茶は小浜・敦賀より北国へ。
茶仲の始まり・・・元禄10年(1698)

小浜の茶水

①滝町の懸水、②妙興寺の雲井滝、③清水町の清水

若狭の茶

井原西鶴 日本永代蔵（元禄 1、1688）

敦賀商人のありさま

茶町の葉茶見世 → 荷い茶屋 → 茶の大問屋（北国輸出）

敦賀・・・寛永 12 年（1635）茶問屋の集合地として茶町形成

問屋 29 人、仲買 20 人

寛文頃 売茶 3 万本強、通茶 2 万本弱

『遠目鏡』茶下高 5 万本強、美濃・近江・伊勢・若狭より来る。

18 世紀以降、越後の茶園の影響で縮小

小浜・・・『拾椎雑話』に寛永 17 年（1640）、天和 3 年（1683）家職

寛永にない茶問屋・茶商人が現れる（米から茶への下り荷の変化）。

10 人 45 人

小浜藩茶仲銀

美濃茶仲銀（1688～）

丹波茶仲銀（1699～）

銀百匁に付き一匁四分の運上銀（このうち 2/3 上納、1/3 茶仲収入）

元禄期の小浜近郊の茶・・・宮川保、名田庄、西津

お茶菓子

鎌倉時代・・・中国から点心（羹・麵・饅頭）

室町末期・・・ポルトガル菓子、カステラ、金平糖、ビスケット等
（当時食用でなかった卵や砂糖）

江戸中期・・・吉宗の甘藷栽培奨励

落雁、求肥、寒ざらし粉、良質の小豆など

饅頭・落雁・羊羹の完成